

近世書籍研究の可能性

——書評 鈴木俊幸編『書籍の宇宙』——

はじめに

近世の書籍に関する特徴の一つに、多種多様な書籍が(前近代の他の時代と比較すれば)大量に現代まで残存しているという事実が挙げられる。「シリーズ〈本の文化史〉」の第二巻である本書に収められた各論考が取り上げる対象は、近世期を中心に実用書から娯楽書まで多岐にわたっており、その中には一般的な文学や歴史学、書誌学などの分野ではあまり取り上げられない書籍も含まれる。

佐藤 温

本書の書名に見える「宇宙」の語は、近世の豊富な書籍の世界を意識したものと考えられるが、こうした研究書に期待されるのは、単に大量かつ多種類にわたる書籍が近世期に存在していたという以上の文化的な意義を提示することである。すなわち、バラエティに富んだ書目や知られざる書籍を紹介するのみに留まらずに、これらの書籍を取り上げる意義をいかに示すことができるかが重要になってくるだろう。

本シリーズの第一巻『読書と読者』に続く本巻は、書籍そのものに光を当てて、その内容のみならず、形態や出版をめぐる事情、市場との関わり、受容者の実態とい

った角度から多様な書籍が生み出されてきた背景を探る。以下、その内容を辿りながら、本書が近世の書籍文化のどのような側面を論じようとしているのかを見ていきたい。

1. 「総論」に見る本書の目標

本書の冒頭で、編者の鈴木俊幸氏は次のような切り口から「書籍の宇宙」と題した「総論」を説き起こす。今日遺存する書籍は何故残っているのだろうか。それは生物の化石がそうであるように、いわば「たまたま」の条件が良い具合に重なった結果残っているとも考えられるが、実際には意識的に残されている可能性もある。また、さらに言えば、現代の我々が目にする書籍によってイメージされる世界は多分に恣意的な要素を含み、「文化的」に歪曲されている可能性がある（八〜九頁）。

この「総論」では、続いて書籍を通して当時の社会や文化の姿を想像することの難しさを、例えば江戸の草紙と上方の草紙（今日、後者の存在感が前者に比べて薄い理由は、前者が近世期から蒐集・考証の対象とされてき

た一方で、後者ではそのような動きがほとんど無かったことによる）のようないくつかの具体的な事例とともに示す。以上を踏まえれば、書籍という残されたモノを相手とする研究では、残された書籍のあるがままの姿を素直に受け入れるだけでは不十分であり、書籍の世界の全体像を常に意識する必要があるということになる。

ただし、実際には現代の我々の前に残された書籍は数量的に膨大で分類上も多種多様である訳だが、鈴木氏はこの豊かな書籍群を「宇宙」に喩えながら、「総論」を次のように結んでいる。

宇宙は廣大無辺である。しかも、日々拡張し続け、遠くの天体はいよいよ遠ざかり、その影を捉えて宇宙の座標に位置づけること、それらの影たちから変化し続ける宇宙の構造を把握することは容易ではない。

書籍の研究にも同様の困難が付きまとう。ぬか星の影も見落とさない注意力と、遠ざかり行く影を追う想像力のスピードとが要求されるかもしれない。しかし新たな星影の発見は癖になり、スピードも慣

れば快感となろう。ネタは宇宙規模的に無尽蔵である。広大無辺の世界、プロ・アマ問わず、夢を馳せるに不足はない。(二六頁)

ここで言う「宇宙」とは興味深い比喻である。実際の宇宙は未だに広さや成り立ちをはじめとして実態の多くが不明で、その中には無数の天体が存在する。そして、その空間では上下も左右もあくまで相対的位置関係を表すに過ぎず、宇宙そのものが膨張によって拡張し続けているとも言われる。

書籍の世界はこの茫漠とした宇宙のごとく、何らかの基準（例えば歴史的時系列・地理的空間・言語・形態）を適用してもある一点や一面しか観測できず、全体像を明らかにするには至らない。しかし、それでも散らばる天体を捉えながらその見取図を作成し、絶えずアップグレードを続けることによって、少しずつその全体像に近づいていくという行為こそが本書の目指すところであると考えられる。

そして、この「総論」に続いて本書には次のような多彩なテーマの論考が配される。

- 1 歴史と漢籍―輸入、書写、和刻―
堀川貴司
- 2 古活字版の世界―近世初期の書籍―
高木浩明
- 3 「書」の手本の本―法帖研究の意義と方法―
岩坪充雄
- 4 辞書から近世をみるために―節用集を中心に―
佐藤貴裕
- 5 江戸版からみる一七世紀日本―
柏崎順子
- 6 領内出版物―治世と書籍―
山本英二
- 7 何を藩版として認めるのか―蔵版の意味するもの―
高橋明彦
- 8 草双紙論
鈴木俊幸
- 9 書籍の近代―東京裨史出版社の明治一五年―
磯部敦

これらは時代やジャンル、あるいは形態も様々な書籍を扱っており、先に見たような書籍研究の「宇宙」像を踏まえれば魅力的なテーマの集合体として映る。しかし、一方でこの集合体はある種の疑問を感じさせるかもしれない。

それは、敢えて「宇宙」（全ての書籍）という大きな括りのもとで書籍を論じることの意味に対する疑問である。実際、「宇宙」全体の見取図を描くことが困難であることもまた自明であり、例えば文学や歴史といったジャンルや、あるいは地域や時代といった明確な区分を設けながら「宇宙」の一部分を少しずつ把握していくほうが堅実なのではないか、という考え方もできるだろう。後にも触れるが、この問いは本書のように書籍全体を対象とする研究が孕む重要な問題を指摘していると言える。

ただし、この鈴木氏の「総論」は敢えてそのことに触れず、また本シリーズ第一巻『読書と読者』の「総論」に記されたような研究史のまとめや展望にも言及しない。すなわち、第一巻の「総論」では読者研究の歩みがまとめられているのに対し、本巻では研究分野も特定せず、近世を中心とする時期の書籍をめぐる幾つかの興味深い

事例を示しつつ、そのまま読者を「書籍の宇宙」へと誘う形となっている。

書籍研究の範疇に含まれるであろう研究分野としては、文学や歴史学、書誌学といった諸ジャンルが存在する。

ただし、それらが一つの総体として認識されることはそれほど多くはない。ここで聊か穿った見方をすれば、この「総論」は様々な領域の専門家たちによつて論じられた書籍研究論文の集積である本書の枠組みそのものの有効性を読者に問うているのではないかとも考えられる。

そこで、続いて各論考の内容を取り上げながら、本書の描く「書籍の宇宙」の見取図がいかなる様相を呈しているのかを確認し、その後この見取図から敷衍することのできる書籍研究の可能性について考えていきたい。

2. 各論考の内容

冒頭に配されるのは、堀川貴司氏による「歴史と漢籍―輸入、書写、和刻―」である。本章で堀川氏は古代から近現代へと至る日本の漢籍受容の歴史を簡潔ながらも丁寧な配慮とともに繙いていくが、そこであらためて実

感されるのが、日本における知識享受の基層に漢籍という海外渡来の知識が不可欠なものとして位置づけられてきた歴史と、書籍の直接的な輸入、あるいは日本における書写や出版（その中には日本人による注釈や再編集を施されたものもある）といった受容形態の多様さである。

そして、この外国書である漢籍についての論者が本書の冒頭に配されるという事実が、そもそも日本の書籍文化史の見過ごされがちな重要な論点を指摘していると言えるだろう。漢籍は一般的な分類上は主に中国文学・中国史・中国思想として扱われる書籍群であるが、一方では日本において多くの漢籍が受容されてきたという歴史が存在する。つまり、日本列島に生きた人々と書籍の付き合いの中でも、特に古い伝統を持つものの一つが漢籍の受容であるとも言えるのである。

こうして日本文化の基層に位置する書籍受容の形を確認して始まる本書では、以降近世期を中心として緩やかに時系列に沿った各論が展開される。まず高木浩明氏による「古活字版の世界―近世初期の書籍―」で、近世初期の出版史を語る上で不可欠な存在である古活字版に光が当てられる。高木氏は、同一本文における活字の差し

替えが行われた異植字本の存在を取り上げ、この一見非合理的な活字の差し替えについて、自由自在に行われている様を実例を通して示し、しかもそれが単なる差し替えを超えて異文を校訂しながら「定本」を追求しようとする姿勢をも可能にしていたことを指摘して、古活字本には写本的な性格が認められるという興味深い指摘をしている。そして、その出版には角倉素庵ら当時の知識人のネットワークが大きく関与していたという見通しも併せて語られている。

この古活字版の例は、特殊な出版行為と見える中に、実は近世の人々にとつての出版と筆写に対する感覚を見いだすための重要なヒントが隠されていることを示唆している。つまり、写本のような印刷物に取って代わって見いだす感覚がそこには存在していたということであり、それは日常的に目にするほぼ全ての書籍や文書が印刷に拠っている現代とは大きく異なる感覚であると言えるだろう。

ところで、この筆写という行為は、近世における書籍の流布にも不可欠なものであるが、そのためには当然ながら人々が文字を読み書きできなければならない。つま

り、人々は文字を書くことを練習し、文字を読むことを学んでいた訳だが、その座右にも書籍は不可欠な存在であった。そのことに関わるのが、続く岩坪充雄氏の「書」の手本の本―法帖研究の意義と方法―と佐藤貴裕氏の「辞書から近世をみるために―節用集を中心に―」である。岩坪氏の論考が扱うのは書の手本の法帖だが、同氏が強調するのは、法帖が（一般的な書誌学の立場から見ると）特殊な性質ゆえ日本人の著作物という範疇から漏れ落ち、また印刷法も多様であるため、これまで明確な数量も把握できず、分類法も確立されてこなかったという現実である。

例えば、法帖に取り上げられる代表的な作品『千字文』には、数多くの日本の書家によつて書かれ日本で出版された法帖が存在するはずであるが、今日それらを網羅的に把握することは困難であるという。それは、『千字文』は厳密に言えば中国人の著者によるものであることから、幾ら日本の書家の手になるとしても例えば『国書総目録』の凡例を適用すれば採録対象から外れてしまうのである。そして、さらに問題となるのが法帖の多様性であり、印刷方法だけでも大きく三種類（凸字版・左版・正面版）

が存在するなど、一般的な書籍の分類では処理しきれない面がある。

岩坪氏は、これまで和刻法帖の研究に手が及ばなかった理由の一つとして、書の手本という存在価値自体が現代では失われていることを挙げている。しかし、同氏の指摘するような「近世以前が毛筆筆記の世界であった事実」（二二五頁）を踏まえれば、その実態を解明する必要があるとする指摘は重要である。つまり、人々は専ら筆で文字を書き、また筆で書かれた文字（版本の版下も原則として筆で書かれる）を読んでいたのであり、その文字の姿・形の持つ特質や書記の道具としての筆の位置付けを考えずに書籍のあり方を考えることはできないと言えるだろう。

また、近世の代表的な辞書である節用集を扱った佐藤氏の論考は、まず近世初期における識字能力の必要の高まりを背景に節用集の需要が大きく増したという受容の背景に触れる。そして、貞享・元禄期以降になると多種多様な日用教養記事が付録として収められるようになるという動向を紹介している。ただし興味深いことに、実はその付録の内容は役に立つものならば何でも載せられ

る訳ではなく、版權の關係から多くの制約があった事情を反映して必ずしも網羅的とは言えないという。また、その掲載情報をめぐっては紛議に発展した例（東本願寺・西本願寺の掲載順が問題とされた）も存在したといい、節用集は多くの享受者を有するゆえに、近世において大きな社会的影響力を持ち得た出版物であったという事情が明らかにされている。

さて、右に取り上げた法帖や節用集の出版は、実用的な側面からの需要の高まりに応じた出版活動の例と言うことができるが、近世の出版では娯楽的な書籍の存在も当然ながら無視できない。そうした出版物の商品価値を見いだし、市場を開拓したのはどのような人々だったのか。その問いに答えるのが、柏崎順子氏の「江戸版からみる一七世紀日本」である。

江戸時代初期（万治・寛文期）には、江戸において題簽から料紙、一丁あたりの行数、字風、挿絵に至るまで京都版とは造本様式を異にする「江戸版」と呼ばれる一群の書籍が刊行されていた。それらの多くは仮名草子などの娯楽性の強いジャンルに属しており、京都のテキストを元版として江戸版を刊行する際には、ほとんど例外

なく右のような造本における改変が行われていたという。

柏崎氏は、その前提として整版印刷の開始とともに新たな技術、出版コンセプト、営業の仕組みを伴う新興書肆が登場した状況に触れた上で、江戸版は京都の書肆と連携した江戸の新興書肆の営業展戦略の中から生まれたという推測を示す。また、その本を商品化していくシステムの背景には各地に展開された伊勢商人のネットワークが関与しており、それが延宝期に至って何らかの理由によつて崩壊すると、江戸の出版界が独自の商品開発を模索せざるを得なくなり、そうした状況の中から江戸の地本が生まれてくるという興味深い見通しが語られる。全てではないものの、多くの書籍は市場に流通し販売の対象となる。その中で、特に娯楽性の強い書籍の場合は、如何に商品価値を宣伝しつつ読者の需要を喚起するかが問題となるだろう。そうした商品としての書籍のあり方が近世期に形成されていく原点を物語るという点において、この江戸版の事例は重要な意味を持つと言える。

ところで、先に紹介した「総論」において、鈴木俊幸氏は今日目にするのできる古い書籍が何らかの意識的な背景によつて残存している可能性などに言及しなが

ら、書籍を通して社会や文化を物語ることの困難さに触れていた。続く三つの論考は、庶民統治、藩の関与した出版、娯楽出版という異なる位相における書籍を扱ったものであるが、それぞれにおいてその困難な課題が浮き彫りにされている。

山本英二氏による「領内出版物―治世と書籍―」が取り上げるのは、歴史の教科書でお馴染みの「慶安御触書」である。ただし、同触書は現在教科書の「お馴染み」の座からは退きつつあるという。それは、近年の歴史研究の成果によってこの触書が近世のある時期に広く流布していたことは事実として存在するものの、肝心の慶安年間に幕府によって発令されたという事実が証明できないことが明らかとなったことに拠っている。つまり、かつての歴史研究は、何らかの事由によって「慶安御触書」が幕初の慶安年間に幕府から出されたという判断を下していたのであるが、そこで研究者たちの目を眩ましていたのが、今日少なからず発見される「慶安御触書」の写本や版本といった残された書籍であった。

それらの原点を辿っていくと、実際に行き着く先は慶安年間の幕府法令ではなく寛文年間の甲信地方の地域教

諭書をルーツに持つ元禄年間の甲府藩法であり、その名称も異なっている。それが写本として流布する中で、一九世紀に至って岩村藩版の出版を契機として「慶安御触書」として広範に受容されるようになったのである。つまり、近世の庶民統制に関わる代表的な幕府法令として想像されてきた「慶安御触書」は、実際は近世後期の一時期において一地方の出版物が全国へと広まった結果流布したものであったということであり、残存する史料や書籍を相手に研究をすることの難しさをあらためて認識させられる事例とも言える。

また、高橋明彦氏の「何を藩版として認めるのか―蔵版の意味するもの―」では、従来「藩版」と呼ばれてきた一群の書籍について、その定義を再検討する必要があると主張される。藩版とはその名の通り諸藩による出版物を意味するが、高橋氏によればその内実は多様であるという。実際、いざ藩版というものを定義しようとしても、その範疇に入る可能性のある書籍は、諸藩の藩主や藩校の出版によって刊行されたもの、費用は藩が負担しつつも出版に関する作業や実務を書肆が行ったもの、藩臣や藩儒が携わって刊行されたものなど多くの場合が考えられる。

しかも、藩版と町版を区別しようとする際に頼りになりそうな刊記・蔵版記にしても、実際のところ藩版は町版の前提とする規制（重版・類版を禁止するための諸規制）の外にあることから、個々の出版に係る事情を町版と同様の基準を適用して読み取ろうとしても困難が伴う。そして更に言えば、藩版と藩儒版の境界を厳密に定めることもできず、その実態は個々のケースにおいて異なると言つて良い。

こうして、高橋氏は究極的には藩版と藩儒版（個人蔵）の区別は不可能であるという見解まで仄めかすものの、結論として「藩版と個人蔵版の区別のためには）やはり一から書誌を取り直し、刊記と蔵版記の関係を明記する必要がある。」（二六五頁）と述べている。つまり、地道な作業の積み重ねこそが藩版と言われる書籍の実態を明らかにする唯一の方法であるという訳だが、このことは一般に書籍に対して為される分類・区分という行為の危うさと、それを乗り越えることの困難さを如実に物語っていると言えるだろう。また、明快な分類から漏れる例外的な事例が多数存在するからこそ、それらを無視するのではなく一つ一つ拾い上げていく態度が学問的な実証

性へとつながるとも言えよう。

続いて鈴木俊幸氏の「草双紙論」は、草双紙受容の実態を鑑賞の形態とモノ（商品）としての観点から浮かび上がらせる。草双紙は基本的に絵本としての体裁を有するが、それを「読む」際にはどのような方法が採られていたのか。鈴木氏は、その享受形態は絵の鑑賞を主としながら、書入れを補助として第三者がその内容を話して聞かせる（例えば大人が子どもと対話をしながら絵本を鑑賞するような方法による）「絵解き」が基本であったと指摘する。

草双紙はその造本や体裁にも見られるように子どもの玩具としての性格を持つており、役者の一枚絵のような蒐集の対象ともされた。また、毎年の正月の景物としての一回性を有する出版物であり、それゆえ消耗品としての側面も持ち、世情の動向を反映した速報性も帯び、さらには恰好の広告媒体でもあった。加えて、当時においては一枚絵も草双紙もまとめて「絵草紙」として認識されていた。そして、その背景には絵草紙屋・行商といった流通機構、そして地本問屋を頂点とした生産機構が存在しており、鈴木氏はその中で生まれたのが江戸の地本

であったと指摘する。さらに、最後に鈴木氏は草双紙の享受層について、「女子ども」の領域が前提として存在するものの、それは建前であり、実際のところ私的な空間においては当時の大人と子どもの曖昧な境界のもので、大人たちも読者として存在していたであろうという興味深い指摘をしている。本論考は、一口に書籍とは言っても、その社会的位相を踏まえた上で、誰がどのようにして手に入れ、どのような場でどのように読んだのかという点を考えなければ実態が見えてこないことをあらためて認識させる。

そして、本書の掉尾に至って時代は近代の幕開けにまで差し掛かる。磯部敦氏による「書籍の近代―東京稗史出版社の明治一五年―」は、明治前期に曲亭馬琴などの稗史の活字翻刻本を刊行した東京稗史出版社の出版戦略と、その前提となった読者層を解き明かしていく。同出版社の初期（明治一五年頃）の活字翻刻本には、その「美麗」を重視した造本などから、一目で同社の刊本であることを意識させるようなブランド戦略の存在が想像される。そのブランドが意識していた読者とは、明治初期に新聞などのメディアの中で顕在化してくる「中人」たち

であった。そうした区分を内面化した人々によって形成され、メディアとともに言説共同体として拡大していくことになる「中等社会」のすそ野においては、稗史の教化ツールとしての実用性が強調されるようになる。その中で、同社の書籍は一つのブランドとして良書の選別指標としての機能を果たしていたという。

近代文学史では、一般にこの後まもなく坪内逍遙が『小説神髓』（明治一八〇九年）で近代小説の幕開けを宣言し、その中で逍遙は馬琴の稗史を批判的に論じたとされる。しかし、馬琴の小説に当時の社会によって求められる作品としての側面があったという事情を明らかにするこの論考は、近代文学の黎明期に存在した、テクストのみからは見いだすことのできない読者たちの姿を浮かび上がらせていると言えるだろう。

3. 本書から考える書籍研究のあり方

以上が本書の概要であるが、ここからはこれらの論考群が描き出す「宇宙」の見取図について考えてみたい。本書を貫く座標軸の一つは近世以前―近世―近代以降と

いう緩やかな時代の推移に求めることができるだろう。しかし、それ以外に各論考を容易に束ね得る概念はなかなか見つからない。それはとりもなおさず本書の扱うところのものが「書籍」であることに起因する。先にも触れたように、ジャンルや時代による括りを設けずに、敢えて膨大な数量と種類の書籍を総体として研究の対象とすることに困難な点も多い。実際、大量の書籍が研究の対象となり得るとは言っても、そのことは単純に研究の可能性が広がることを意味するとは限らず、何か目に付いた書籍を取り上げれば研究が成立する訳ではないことは言うまでも無い。

そうした中で、本書に収められた各論考の質を担保しているのは、対象こそ様々であれ、いずれの論考も「書籍とは人々にとつて一体何だったのか」、あるいは「なぜその書籍はそのような形で生み出される必要があったのか」という問いへの返答を試みているという事実である。本書はそれを書籍というモノの検討を通して行いながら、「書籍の宇宙」の中で我々が目にする書籍の一点一点は微々たる存在であるとしても、書籍そのものの物語る情報を見落とさずにまとめていくことよって「宇宙」の

全体像を少しづつ明らかにすることができる、という豊かな可能性を示していると言える。

ただし、ここで敢えて厳しい見方をするとすれば、書籍研究はこの豊かさの前提となる研究対象の膨大さゆえに、現代の研究領域において必ずしも定まった立ち位置を確保しているとは言いがたい。本シリーズの第一巻の冒頭に収められた「刊行にあたって」には、書籍研究・出版研究の現在の研究界における立場について次のような言及がある。

書籍・出版研究が盛んになってきたといっても、たとえば歴史研究にしても、研究者のすべてが書籍を史料として認知しはじめたわけではない。むしろ、おおかたの研究者にとつて書籍の研究は、流行りの分野だというような認識にとどまり、自らが積極的にそれに参与するものとはなっていない。(鈴木俊幸・横田冬彦・若尾政希「シリーズ〈本の文化史〉刊行にあたって」『説書と読者』、二〇三頁)

この第二巻もそうであるように、一般に書籍研究はそれ

それぞれの専門領域を持つ人々による多角的な研究に基づいた緩やかな枠組みとして存在していると考えられるが、一つの学問領域として存在している訳ではない。右の引用では歴史研究の領域における状況が念頭に置かれているが、例えば文学研究の場合でも状況は類似していると思われる。すなわち、書籍研究は新しい視座を提供するものとしてその有用性を認識されつつ、一方では特にテキストを主な研究対象とする立場から見た場合、ともすればモノに必要以上のスポットライトを当てているという見方が為されることもあるだろう。

しかし、先に示した本書の各論考の概要でも見たように、書籍のあり方を明らかにすることは、すなわち書籍受容の実態を明らかにすることを意味する。例えば、書籍を市場に流通する商品として見ることは、作品の価値をテキストの範疇に収まりきらない書籍そのもののあり方から考えることにつながる。また、様々な書籍を対象として近世の人々の知的営為のあり方を確認し、その成果を文学テキストの解釈に反映することは、作品に注釈を付す際の基本的な作業の一つでもある。このように、書籍研究と文学研究が密接な関係にあることはあらため

て触れるまでも無いであろう。

ただし、こうした観点から見た場合の書籍研究は、あくまでも所謂「文学作品」の存在を大前提としつつ、そこからより広い範囲のテキスト（あるいは書籍の形態をとつたもの）へと対象を拡張しようとする試みとして位置づけられることになるだろう。また、これは歴史研究などの他の領域においても類似したことが言える。だが、書籍研究はこうした既存の研究領域の拡張という以上の意味は持ち得ないのだろうか。

一本書を通読すると、書籍研究の最大の可能性は、文学テキスト、歴史文書、思想テキストなどの個々の分野を包括した書籍という枠組を敢えて研究の対象とするという点にこそあるのではないかということに気づかされる。すなわち、書籍研究は既存の研究領域に対する補助的な役割を担うというだけのものではなく、個々の研究領域からは漏れてしまう書籍を拾い上げること、人々ととつての書籍の意味を問い直すことにその意義を見出すことができるのではないだろうか。つまり、既存の概念枠の拡張ではなく、むしろ既存の概念の妥当性の有無を検証する一つの作業としての可能性こそが重要にな

ると考えられる。先述の鈴木氏の「総論」が指摘するよ
うに、現代のわれわれが見る書籍によってイメージされ
る世界が恣意的な要素を含み、「文化的」に歪曲されてい
る可能性を考えた場合、そこから逃れるための有効な方
法が、未発見もしくは隠蔽された書籍を掘り起こすとい
う行為であると言えるだろう。

翻って、本書に収められた論考を見ていくと、各論は
その問題について意識的な取り組みを行っている。例え
ば、岩坪氏の法帖に関する論考は、前時代には日常的に
親しまれていた書籍が文化的な状況の変化によって顧み
られなくなってしまうことに警鐘を鳴らし、堀川氏の
漢籍に関する論考は、同様に現代になって殆ど存在感の
無い漢籍というものが、実は前近代の書籍受容の中でも
長い歴史を持ち、日本の書籍文化史を物語る上で不可欠
な存在であるという忘れがちな事実を認識させてくれる。
一方で、山本氏の領内出版物に関する論考は今日残存
する資料という物証を過信した結果、近世期に創造され
た言説がそのまま敷衍されてきたという実態を明らかに
する。また、残された資料に対して現代の感覚を適用す
るだけでは意味を見誤ってしまう可能性があることに

いては、古活字版の制作にあたって、同一本文の大量生
産を主目的とする今日の一般的な印刷とは異なる、むし
ろ写本を作成する際に近い意識が存在していたことを示
す高木氏の論考からうかがうことができる。

さらに、近世の書籍を語る上で外すことのできない出
版制度についても、本書の論考は一般論だけでは捉えき
れない実情を浮かび上がらせている。例えば、鈴木氏が
指摘するように市場の中で一過性の商品として大量生産
される草双紙のようなものがある一方で、高橋氏が取り
上げる藩版の問題は、流通する書籍を町版を前提とした
出版制度の原則のみによって一義的に捉えることはでき
ないという事実を物語つてもいる。

他にも、柏崎氏の論考で明かにされているように、一
見すると今日の視点からは非合理的にも見える江戸版と
呼ばれる一群の書物が、実は当時の新興商人たちによる
合理性を追求した営業システムの産物であったという事
情は、書籍のモノあるいは商品としての性質をまざまざ
と語っていると言えるだろう。そのことと関連して言え
ば、東京稗史出版社を取り上げた磯部氏の論考は、書籍
は商品である以上、買い手に対して訴求する要素（ブラ

ンドイメージや読者が求める本文の質)が無ければならないという現実を端的に表している。また、書籍は商品であるが故に多くの制約を受けることもあることを、節用集という一見雑多な内容の集積物のように見える書籍の出版に際する版權の事情から明らかにした佐藤氏の論考も貴重な指摘であると言える。

おわりに

本書に収録された論考の対象とする書籍は多様であるが、それらの独立した価値を持つ論考を収録しつつも本書は一つのまとまりとして成り立っている。その理由は、個々の論考がiguezれも、各々の対象とする書籍がその時代や文化的環境の中で生み出された背景について意識的に論じているという事実に求められるだろう。そして、それらを一つの集合体として提示することによって多様な書籍からなる「宇宙」の実態に近づこうとした点こそ本書の重要な意義があると考ええる。

広大な「書籍の宇宙」には、既存のジャンルや学問領域による定義付けに収まりきらない書籍が多数存在する。

それらを敢えて研究対象として取り上げ、個々の書籍や書籍群のあり方を明らかにしていく行為は一見すると迂遠に感じられるかもしれないが、実はそれこそが「書籍の宇宙」の実態に近づく唯一の方法であると言える。その一つ一つは見落とされがちない目立たない書籍や、取り立てて特徴が見られないような書籍であっても、それらは書籍によって形作られてきた文化の姿を時に鮮やかに映し出す潜在的な輝きを持っている。本書は、それらの位置付けを適切に把握することで、「宇宙」の全体像を少しずつ明らかにしていくという書籍研究の形を提示しながら、その研究の魅力を存分に物語っていると見えるだろう。

(鈴木俊幸編『書籍の宇宙―広がりと体系―』(「シリーズ」本の文化史」2)、平凡社、二〇一五年五月刊、定価・本体三、〇〇〇円、総頁数三四四)